

# 樹木と絵画の交差点

## 第 11 回 ～桃山絵画と樹木～

織田信長と豊臣秀吉が政権を執っていた安土桃山時代（16 世紀後半）は、短いながらも華やかな文化が花開いた時代でした。戦国大名たちの依頼を受けて城に巨大な金碧障壁画が描かれ、樹木を主題にした傑作がいくつも生みだされました。その画面には、戦国時代の豪胆な気風が生き生きと写しとられています。桃山の絵画様式を築いた天才絵師狩野永徳（1543-1590）の作品を中心に、桃山絵画に描かれた樹木を見ていきましょう。



### 狩野永徳

桃山時代を代表する絵師。江戸時代まで続く狩野派の四代目の棟梁として才能を発揮した。織田信長の安土城、豊臣秀吉の大坂城や聚楽第の障壁画制作を請け負った。

「唐獅子図屏風」(部分) (16 世紀後半)

宮内庁三の丸尚蔵館蔵

### 生き生きとした筆さばき

当時の工房では、絵を学ぶ時、また教える時には絵師の技術を均一化するために“<sup>ふんぽん</sup>粉本”という絵の手本を使って模写をするのが決まりごとでした。制作に多くの人に関わり、また納期におさめなければならないのでマニュアル（手本）が必要ではあるのですが、手本を見て描く絵は画一的になり、生気が薄れた表現になってしまいます。永徳は代々狩野家に伝わる粉本<sup>注1</sup>を基礎にしつつ観察を良くし、毛筆の線のひきかたを工夫するなどして、粉本を超える生き生きとした表現を身につけていきました。



聚光院障壁画 花鳥図襖絵(部分) (16 世紀後半) 大徳寺聚光院蔵 国宝 狩野永徳

京都大徳寺の聚光院の襖絵、春から秋に移りゆく景色のうち的一面。春を告げるウメを描いています。ねじれながら川に向かって枝を伸ばす樹木の存在自体がドラマチックです。枝が左方向に徒長していく様子や、根元が浮根状になりながら樹体を支える様子はよく観察したうえでデフォルメした様子が見受けられます。枝は黒く鋭く、幹は荒い筆触を活かして、根元は白く輪郭線を活かして描き分けられており、生きた筆遣いが画面のすみずみまで行き渡って、粉本をなぞった絵とは一線を画しています。

## 時代に響く壮大な絵

永徳率いる狩野派の仕事は戦国大名たちの目に留まり、安土城、聚楽第、大坂城など次々と障壁画制作事業を請け負います。下克上を生き抜く大名たちは豪華絢爛でダイナミックな画風を好み、永徳もそれに応えて大画面に大胆な構図、荒々しい筆致を活かした表現を打ち出していきました。その出来栄えに信長や秀吉も満足したのではないのでしょうか。こうして永徳が築きあげた障壁画のスタイル（桃山様式）は時代の空気にぴったり合致して、その後の長谷川等伯など後続者も競うように迫力ある障壁画を生み出していきました。短いけれど濃密な様式の動きがあった桃山絵画、その規範となった永徳の業績は堂々たるものです。

桃山様式で描かれた巨樹（マツ、ヒノキ、スギ）の作品を観ていきましょう。



**老松桜図屏風**  
(16世紀後半)  
ホノルル美術館  
伝狩野永徳

マツは長寿・繁栄の象徴として諸侯に好まれました。この絵ではマツの全体が見えないほど大胆に配置されています。幹が画面を横切って、根や枝が窮屈で構図が破綻しそうですが、永徳の剛腕で絵をまとめあげています。抽象化された松葉の形や岩の勢いある筆致が画面に安定感をもたらしています。



**檜図屏風** (16世紀後半) 東京国立博物館蔵 国宝 狩野永徳

ヒノキは古来から日本に縁の深い樹木で、伊勢神宮など多くの神社仏閣の建築資材に使われました。築城の際にも大量に使われたことでしょう。この絵ではヒノキの幹や枝の伸び方が特徴を捉えつつ、形がデフォルメされていて、ねじれた樹形に迫力があります。背景の金色の雲は桃山様式の典型です。金地の上に描かれたヒノキの枝葉は細かい描写が引き立ち、より一層画面が引き締まって見えます。



富士山杉樹図屏風 右隻 (16世紀後半) 金刀比羅宮蔵 伝狩野永徳

日本人のこころともいえる富士山との組み合わせで描かれています。画面に厳粛な空気が充満しています。スギは古代から“神の寄り付く木”として信仰されていました。スギの根元を見せない構図で、手前に並ぶスギ群から富士山の頂きを仰ぎ見るように視線が誘導されて、絵がどっしり安定しているように感じられます。金色の雲の効果は控えめで、奥の富士山の神々しさが演出されています。

“伝狩野永徳”となっていますが、永徳の作品ではなく、長谷川等伯に近い絵師の作品ではないかという説もあります。静かに広がっていく画面の空間は確かに等伯の代表作“松林図屏風”にも通じるものがありそうです。この絵には桃山絵画のひとつの達成があるように感じられます。

## スギについて

スギ (*Cryptomeria japonica*) はスギ科スギ属の常緑針葉樹で、日本の固有種です。屋久杉に代表されるように樹齢が 2000 年を超える木もあり、寿命が長い樹種です。縄文から弥生時代にかけての古代の遺跡からはスギ材が大量に発見されています。万葉集には “古(いにしえ)の 人が植ゑけむ杉が枝に霞たなびく 春は来ぬらし” (解釈: 昔の人が植えたというスギの枝に霞がたなびいていることだ。春はやってきたに違いない。) 作者未詳『万葉集』巻 10-1814 雑歌 という歌があり、スギが古くから植樹されていて、生活に身近にあって利用されてきた樹木だったことが伺えます。

一方現代人にとってスギは花粉症の原因として頭を悩ませるものです。スギの花粉飛散量は 1900 年以降徐々に増えはじめ、1998 年頃には 1900 年の約 10 倍に達しています。スギ人工林の増加、そしてその伐採の機会を逸したことにより、1970 年代から花粉飛散量が急激に増加してきたと言われていています。とはいえ昔から日本に多くあったスギの木です。古代にもスギ花粉は飛んでいたはずで、古代から現在までス

ギ花粉の量はどんな推移をたどったのでしょうか？2011年の論文にこんなデータがあります。琵琶湖の湖底堆積物の花粉量を分析した結果、115,000年前の一時期と3000-2000年前の一時期のスギ花粉の飛散量が今と変わらないレベルだったという意外な事実が判明しました。つまり”現代のスギ花粉の飛散量は縄文時代の飛散量とさほど変わらない”ことが分かったのです。もしかすると縄文人にもくしゃみや鼻水に困っていた人がいたかも知れません。縄文人に比べ私たち現代人は寿命も長くなり、コンクリートやアスファルトに覆われ、生活環境が大きく変わりました。同じ花粉飛散量でも、様々な条件の変化により私たちの身体は刺激に過敏になってしまったということも考えられます。

千葉県長生郡長南町の笠森寺は奈良時代からの古刹で、寺の周辺（笠森寺自然林）は国指定天然記念物に指定されています。この一帯はスダジイやカシ類が主体となる常緑広葉樹林で、笠森寺草創当時(784年)から禁伐林として保護されてきたと伝えられています。林中にはスギの大木「三本杉」があります。離れた場所から見ると3本のスギがあるように見えるのですが、近寄って観察すると3本が根元でひとつに癒合していることが分かります。全国に「三本杉」と呼ばれる巨樹は茨城県の御岩神社（御岩山の三本杉）、長野県の戸隠神社（戸隠の三本杉）、京都府の<sup>だいひぎん</sup> <sup>はなせ</sup>大悲山（花脊の三本杉）などがあります<sup>注2</sup>。3本の大スギが真っ直ぐ空に向かって幹を伸ばしていく様は神々しく、スギの巨樹が生きてきた悠久の時間を感じさせてくれます。



笠森寺の三本杉

撮影場所：史跡名勝国指定天然記念物 笠森寺自然林（千葉県長生郡長南町）

※注 1

狩野派の粉本は、インターネット「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧可能。

<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2609677> (参照 2022-7-16)

※注 2

ここに挙げた“三本杉”と呼ばれるスギは、それぞれに樹形や植栽が異なる。「御岩山の三本杉」は地上 3m で 3 本の幹に分かれた樹形。「戸隠の三本杉」は戸隠神社の鳥居を中心に 3 本のスギが正三角形に並んでいる、その 3 本の事を指す（そのうち鳥居後方の 1 本は 3 つのスギが癒合した樹形になっている）。「花脊の三本杉」は 3 本が根元でひとつに癒合している樹形。2017 年、林野庁の計測により“日本一高い樹木”と認定された（樹高 62.3m）。

戸隠神社ホームページ 戸隠の歴史 三本杉の話

<https://www.togakushi-jinja.jp/about/history/myth06.php>

近畿中国森林管理局ホームページ 高さ日本一・花脊の三本杉（測定結果）

<http://www.rinya.maff.go.jp/kinki/kyoto/information/H29/291128sannbonsugi.html> (参照 2022-7-16)

《参考論文》

林竜馬、兵藤不二夫、占部城太郎、高原光「琵琶湖湖底堆積物に記録された過去 100 年間のスギ花粉年間堆積量の変化」  
日本花粉学会会誌 2012 年 58 巻 1 号 p.5-17

《参考文献》

成澤勝嗣「もっと知りたい狩野永徳と京狩野」東京美術 2012 年（アート・ビギナーズ・コレクション）

川本桂子「狩野永徳」新潮社 1997 年（新潮日本美術文庫 3）

鈴木和夫、福田健二編著「図説 日本の樹木」朝倉書店 2012 年

《参考 URL》

四国新聞「金比羅宮 美の世界」第 10 回 伝狩野永徳筆 富士山杉樹図屏風 伊藤大輔

<https://www.shikoku-np.co.jp/feature/kotohira/story/10.html> (参照 2022-7-16)

田中淳夫「縄文人はくしゃみをしたか？ 当時のスギ花粉量は現代と一緒だった」

<https://news.yahoo.co.jp/byline/tanakaatsuo/20190403-00120815/> (参照 2022-7-16)

桜井市役所ホームページ ひみこの里・記紀万葉のふるさと

<https://www.city.sakurai.lg.jp/kanko/manyokahimeguri/kashiramoji/agy/1394851611071.html> (2022-7-16 現在、記事は削除)

渡邊明子 國學院デジタルミュージアム 万葉神事語辞典-スギ

[http://jmapps.ne.jp/kokugakuin/det.html?data\\_id=32058](http://jmapps.ne.jp/kokugakuin/det.html?data_id=32058) (参照 2022-7-16)